

問六 傍線部3「同時に僕を捉えてもいたからだ」とあるが、これは主人公のどのような状態を表現しているか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

イ 友人のつらい無念な気持ち¹が理解でき、生きていく意味がわからなくなっていた。

ロ 友人の自殺によって、自分もいつか死ぬかもしれないと不安²になっていた。

ハ 友人の死に強いショック³を受け、これまでの自分の生き方が空しいものに思えていた。

ニ 友人の死によって、これまで遠い存在に思えた死の現実性⁴が意識にのぼるようになっていた。

ホ 友人の死の衝撃⁵から、すべてがどうでもよくなり、生死を混同する危険な意識に捉われていた。

第七問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① かつて、人間の生活と生命の安全を脅かすものは「自然」であった。地震、津波、洪水、火山の噴火、台風、あるいは野獣の襲撃など、自然の脅威と呼ばれるものが、人間にとって、最大の危険であった。もちろんその前に、十分な食料や雨露を凌ぐだけの住居の確保、あるいは病氣と怪我への対策などが、よりキンキウな関心事であったろうが、しかし共同体が、あるいはそこで育まれた知恵が、そうした対策をある程度引き受けたとしても、「自然の脅威」はどうにもならなかった。この事情はどの文化圏においても、本質的には同じだったと言つてよいだろう。

② 西欧の歴史においても、事情は変わらなかった。とくにキリスト教の支配するヨーロッパにあつては、創造主である神の計画に支配されている自然は、人間の制御や支配の能力を超えたものとして、ある程度以上の自然への人為の介入は忌避され、あるいは諦められていた。むしろ自然のなかで人為を如何に生かすか、ということに人々は、フシンしていたとも考えられる。たとえば、森林のなかに溶け込むように建っている古い修道院や教会の建築などは、そう思わせるオモムキがある。しかし、一八世紀になって、ヨーロッパは俄然大きな転回を経験する。

〔出典〕
村上陽一郎
『安全学』

〔著者出題歴〕
・東北大学
・東京大学
・福井大学
・大阪大学
・九州大学
・鹿児島大学
・青山学院大学
・早稲田大学

■ 第七問

③ もちろんユダヤ・キリスト教の伝統のなかには、神がこの世界を創造したのち、その管理を人間に委託したという思想が含まれている。「創世記」第一章の記事は、そのことを語っているし、神学的にも「地の支配」という言葉が残ったことも、それを裏書きしている。かつてアメリカの技術史家リン・ホワイ・ジュニアは、そのことを根拠に、キリスト教こそ、今日の地球環境の危機を招いた元凶であるという告発をした。「創世記」の言うところを根拠に、ヨーロッパは、自然を人間の自由になるもの、搾取すべきものとして捉えてきたために、地球的な危機が生じたからだ、と言うのである。

④ この見解に従えば、キリスト教的ヨーロッパには、本来、自然を人間の恣意のままに制御・支配・搾取する契機が内包されていたことになる。

⑤ しかし、この言い分は、一七世紀までのヨーロッパの自然に対する姿勢が、一八世紀になって急旋回を遂げたという点を考慮に入れていないという点で、根本的なケツカンがあるように、私には思われる。

⑥ 言うまでもなく、一八世紀ヨーロッパの特徴は啓蒙主義である。彼らが攻撃目標に定めたのは、キリスト教そのものだった。人間をキリスト教という迷蒙から解放し、人間理性を至上のものとして位置付け、すべてを、人間理性の支配の下に再編成すること、これが「啓蒙」という考え方の根本であった。そこから「文明」という概念も誕生した。

⑦ 「文明」という概念は、啓蒙主義のイデオロギーに裏付けられたものである。神から自立し、神を棚上げし、人間の悟性のみを頼りに、すべての世界構造を再編成しようとするとき、それを達成していない状態は「非文明」とであると定義された。「自然」を「自然」のままに放置しておくことは、「野蛮」なことであって、「文明人」の資格に欠けることになる。

⑧ ここには、神の被造物としての「自然」への畏敬はすてにない。自然の前の人為の無力さを自覚するような謙虚さもない。あるのは、人間が「主人」であるという意識であり、人間の理性こそがすべてを取り仕切ることができるという傲慢さである。

⑨ かくいって一八世紀ヨーロッパに興った「文明」のイデオロギーは、人為の優越性と、自然のそれに対する従属性という概念を柱に、人間は、自己の欲望を解放し、解放された欲望の充足のために、自然をできる限り支配し、制御し、搾取することを、自らの課題とすることになった。人為によって支配され、制御されていない「自然」は、「野蛮」であり、「未開」であり、「非文明的」とであると考えられるに至った。

⑩ 人間が対決すべきは「自然」であり、「自然」の脅威、そこからくる危険を除き、あるいは軽減するだけでなく、非能率や不経済を積極的に矯正することができる力を人間が備え、かつその力を発揮しなければならない。

6

と漢字に改めよ。

[illegible]

創造主である神の計画に沿って支配されている自然を、神聖不可侵なものと

して崇拜し、人為を一切介入させようとしない謙虚な姿勢

険なものとみなして、その制御を神に期待する敬虔な姿勢。

とづき、自然を管理・支配しようという神に忠実な姿勢。

程度以上の自然への人為の介入を避けようとする控えめな姿勢。

という、キリスト教に内包されている思い上がった姿勢。

し。答えよ。

為の調和した安全で平穩な社会をあらゆる地域で形成すべきだという考え方。

に制御できる合理性をこそ至上の価値として見なすべきだという考え方。

から、自己の欲望充足のためにできる限り自然を支配しようとする考え方。

一キリスト教という迷蒙から目覚め、理性を至上のものとして位置づけた人間は、

世界中の人々を宗教の支配から解放することを課題にしているという考え方。
ホ 神の創造した自然を放置しておくことは「野蛮」であり、自然を人為化し「文明」に再構成することこそ、人間が神から与えられた使命であるという考え方。
問五 傍線部4「そこからくる危険」とあるが、この「危険」が具体的に述べられている一文の冒頭5字を、本文中から抜き出して記せ。

問六 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- イ 今日「先進国」と「途上国」という序列づけの根底には、自然性の存続は野蛮だという考え方がある。
- ロ どの文化圏においても、自然の脅威と同様に、住居や食料の不足および病気と怪我は最大の脅威であった。
- ハ キリスト教には、できる限り自然を改変することが人間の最大の使命である、という考え方が含まれている。
- ニ 自然条件の厳しい地域ほど、自然の脅威への不安から、人間に救済を与える宗教が生まれる傾向があった。
- ホ 人間が生きているには自然を徹底的に支配し制御すべきだという考え方は、どのような文化圏にも存在した。

近代的子ども観の誕生

第八問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① われわれはなぜ、子どもに対して、純粹とか無垢といったイメージを思い浮かべるのだろうか。現実の子どもたちは、学校や塾での友だち関係や家庭環境のなかで、大人と同じように悩み、そして狡猾に立ち回ったり、ときには思わぬ世知を發揮したりもする。自分の子ども時代をふりかえっても、ただ無垢な存在であつたとはどうも思えない。多くの人がそう感じているはずなのに、われわれが子どもを見ると、心のどこかで子どもは純真無垢であるという観念が働いてしまい、それはなかなか拭いきれない。子どもを大人とは違った特別な存在と見るこのような観念は、いったい何に由来するのだろうか。

② われわれは誰もが、大人になる前に、子ども時代を経験する。同じ人間でありながら、年齢によって、人は大人と子どもに区別され、社会生活の多くの局面において異なった扱いを受ける。今日のわれわれの社会では、幼児期、子ども期、思春期、青年期、中年期、老年期などさまざまなライフステージの区分があり、人はそれぞれの年齢段階にふさわしい行動をとるよう社会から期待されている。それぞれの段階に、法律や制度や慣習による年齢規範や文化規範が存在する。多くの社会学者がシテキしてきたように、年齢は人びとを社会的に区分し編成するための非常に大きな原理であり、そのために人のアイデンティティを構成す

〔出典〕
河原和枝
『子ども観の近代』

〔著者出題歴〕

- ・愛知教育大学
- ・大阪府立大学
- ・奈良教育大学
- ・青山学院大学
- ・駒澤大学
- ・早稲田大学
- ・亜細亜大学
- ・同志社大学
- ・甲南女子大学